

新島襄の志を受け継ぐとは

講演	沖田 行司【おきた・ゆくじ】
講師紹介	同志社大学社会学部教授 〔研究テーマ〕日本人の人間形成と伝統文化の関係を解明する

ご紹介いただきました沖田行司です。40年間同志社大学の教壇に立ってまいりました。今年70歳になり、来春同志社大学を退職いたします。最後の1年の授業に「新島襄の志を受け継ぐとは」というテーマでお話をする機会を得ましたことを、大変嬉しく思っています。本日の講義には、恩師でもあります井上勝也先生がおいでになっています。「40年間、お前はちゃんと新島の志を受け継いできたのか」と、退職前の審査を受けるような気持ちで、いささか緊張しています。

本日のテーマは「新島襄の志を受け継ぐとは」という疑問形になっていますが、これは私自身への問いかけでもあるわけです。今、なぜ新島襄の志を考えるのか。学生時代をいれまして50年間の同志社生活をおとす、私学の存在が曖昧になっていると強く感じます。また国立大学を補完するような偏差値の輪切りで学生たちが同志社に来ていて、学生の間に同志社で学ぶ誇りといったものが希薄になっているという思いを年々強くしています。もう一つは文部科学省の私学に対する締めつけもあります。補助金を獲得するために国が考えたスタンダードに、同志社大学も合わせてゆく傾向が年々強くなります。「補助金をもらうために同志社大学も文部科学省の方針を受け容れなければならない」という考えが主流となっています。日本の近代国家の形成には、私学が大きな役割を果たしてきたのは周知のとおりです。現在に至っても、日本の繁栄に私学は大きく寄与しています。したがって、私学に対する補助金は、私学で学ぶ学生にとっては国民の権利であると考えます。これに関しては、教員間でも意見が分かれるところではありません。

1875（明治8）年、新島襄はどういう思いで同志社を創設したのでしょうか。新島が最初に考えたのが「官学との差異化」であります。同志社は私学であり、徳育をとおした人間形成を重んじ、知育を重んじる官学とは異なる教育理念をもっていると新島は主張したのです。日本の近代は旧帝国大学だけが支えたように錯覚している人も多いのですが、日本の近代国民の形成を支えたのは多くの私立の教育機関に他なりません。近年、財界の要請を受けて、文部科学省は経済的効率を高めるための大学改革を推進してきました。知識をどんどん学生に詰め込んでいく。試験で学生を選別していく教育を、果たして新島は求めたのでしょうか。新島は、同志社の門を出るものは政治家になるもよし、経済人になるもよし、と述べています。ある学生は文学や芸術に没頭し、またある学生はスポーツに青春のエネルギーを費やすというように、知育・徳育・体育の総合的な学びができることが同志社教育の特質でもあったわけです。新島が同志社を創設した思いに立ち返って、建学の精神と新島襄の志について考えてみたいと思います。

新島の遺言

1890年1月21日夜半から翌日の未明にかけて、神奈川県大磯の旅館で新島は危篤状態に陥ります。新島八重、小崎弘道などを枕元に呼び寄せ、最後の力を振り絞って、なんと1時間40分にわたり、同志社の行く末を案じながら遺言を語るのです。皆さんは新島の遺言を見たことがありますか。息を引き取る前の1時間40分、新島は何を語ったのでしょうか。この遺言には建学の精神と同様に新島の志が述べられています。この遺言は卒業式や入学式でもあまり語られることはありません。しかし、これには、新島が同志社を創設する際に思い描いた志の総決算が込められているのです。

遺言の一つに「同志社に於いては、偶儻不羈なる書生を庄束せず務めて其の本性に従い之を順導すべし以て天下の人物を養成すべし」とあります。「偶儻不羈」というのは、他人の束縛を受けることをよしとしない若者、たとえ先生の言うことも聞かない生意気な学生であっても、抑えつけない。こういう学生であっても、その特性を引き出して順導して人物を養成することが重要である、と新島は述べています。新島自身の青春時代を彷彿とさせます。つまり、「偶儻不羈なる書生」というのは、新島襄そのものであったわけです。学生の個性を潰してはならないというのは、同志社教育の特質の一つである「個性の尊重」の教育を意味しています。「天下の人物を養成す」とは、智徳兼備の教育をとおして、単に知識の豊かな頭の良い人を養成するのではなく、存在感のある「良い人物」を養成するのが同志社の教育目的ではなかったかと考えます。知識中心の教育を超えて人間教育を行うのが、新島が描いた私学同志社の教育の目的であったのです。新島が見た当時の官立学校は知識中心の教育を行っていて、国家官僚として立身出世を果たす人材を養成していた。しかし、新島がめざした同志社の教育は、それとは異なるものであった。残念ながら、現在では「偶儻不羈」なる学生を教育する余裕もなく、規格に合わない学生を排除しようとする傾向にあります。

遺言の二つ目は、新島が同志社の教職員に宛てた「同志社は隆なるに従ひ機械的に流るるの恐れあり切に之を戒慎すべし」という遺言であります。私が入学した時の同志社大学は6学部でした。他学部の先生からも親しく指導を受けた記憶があります。同志社出身の先生方が多く、ご自分が受けた教育を学生にも施すという、同志社ファミリーの雰囲気の中で学ぶことができた。今は14学部となり、先生の数も倍近くなっています。規模が大きくなるとうるさくなるか。教師と学生は見知らぬ人となります。キャンパスを歩いていても分からない。教師と職員も、教師と教師も見知らぬ他者となって、お互いに日頃挨拶も交わさず。これが当たり前になっています。かつては、先生同士で食事をしたり学問論議をしたりする余裕がありました。また夏休みには学生と旅行に出かけたり、徹夜で議論することが当たり前でした。喫茶店で何時間も話をしましたが、今はそういう無駄なことはしない。学生たちは講義に出て話します。学生も教師も、機械的に流れるというか、授業が終われば通りすがりの他者になってしまいます。教師は決められた回数の講義をして、点数を出します。なるべくクレームをつけないように、学生全員にいい点数をつける教員も少なくはありません。いわゆる楽勝コースです。学生一人ひとりと教師が対面する教育をやっているのかどうか。そのための制度的な保障も必要です。新島の遺言から考えないといけないことだと思います。

建学の精神

そういう中で「建学の精神」もさまざまに解釈されています。「国際主義」の意味するものは何か。英語検定の資格を修得し、英語の成績が良くて留学する学生が、国際的な資質をもった学生ということになります。なんだかまだ戦戦時の占領政策が続いているような錯覚に陥ることがあります。中でも、最近よく言われる「良心教育」とは何でしょうか。地下鉄のエスカレーターに乗る時、「歩かず立ち止まって乗ってください」とアナウンスがあり、また大きく注意を促すポスターが貼られています。今出川駅で降りてエスカレーターを利用する同志社の人で、立ち止まる人はほとんどいません。皆さん足早に歩いてゆきます。ここでは公共の道徳に耳を傾けるより、我先に駆け上がる「自由主義」を優先するほうが良心的なことでしょうか。最近「良心学研究センター」が良心について考えるさまざまな講演会を開催していますが、学生はおろか教職員もほとんど見かけません。同志社科目やキリスト教文化センターが提供する授業などで「良心」について学びますが、多くの学生はどのような「良心教育」を受けているのでしょうか。少し疑問に思うところがあります。次に、同志社の建学の精神の一つとされている「自由主義」について考えてみましょう。何をやっても自由だ、自分の主張さえ通ればいい、それが自由主義だと考えている人もいられるかもしれません。新島が主張した「自由主義」とは一体何であったのでしょうか。新島の青春時代を振り返って考えてみる必要があります。

青春の憂鬱

新島の原体験には「自由になりたい」と願う抑圧された青春があります。近世封建社会は身分に応じて家職が配分されます。祖父の時代に足軽から身を起こした新島家では、父は祐筆職という職分が与えられていました。記録を付ける仕事は、今日ではホワイトカラーで文字を扱う仕事だから高級な仕事と思いがちですが、必ずしもそうではありません。当時の祐筆職というのは、お殿様はどこに出かけ、何を食べたか、トイレに何回行ったかとか、きめ細かく記録する。外出する時には玄関先で土下座して送り出す。高い身分の武士が就く仕事ではなかったのです。新島家に与えられた家禄は6両二人扶持というものでした。当時のお手伝いさんの給金が年に2両ぐらいいすから、あまり高い家禄ではなかった。しかし、お父さんの明治は祐筆職で文字も書けたので、家では書道塾をやっていて生活は安定していたと言われていました。

こういう状況の中で新島家待望の男子として新島襄は生まれます。黒船が来航する少し前です。日本の社会は百姓が生産したお米を年貢として徴収し、それを大坂でお金に換えます。武士は何も生産的な仕事をしない。江戸時代の半ばぐらいから幕府でも諸藩でも財政困難に陥ります。当時は身分の高い家の子どもが有能とは限らない。今もそうですが、祖父が総理大臣だからといって孫は必ずしも有能な政治家であるとは限らない。これは門閥制度の弊害です。財政改革などに能力を発揮できる有能な人材を養成しようとするようになります。各藩では、人材養成のための藩校と呼ばれる学校を創設します。江戸時代には約300の藩があり、260校ぐらいの藩立学校があったと言われていました。今の公立大学に相当します。教育は各藩の自由裁量でしたので、各藩で人材育成をいたします。新島が生まれた安中藩でも人材育成に取り組みます。幕末の名君の一人に数えられた藩主の勝明は、3人の若者を選んで蘭学を学ばせました。当時、蘭学は西洋の知識が得られる唯一の学問でした。中国から入ってくる漢訳の書物もありましたが、蘭学は世界に向かって開かれた窓でもあったわけです。新島は最早より抜擢されます。よくできただけのようなね。新島少年にとっても新島家にとっても、これは名誉なことであり、まさしく希望の光であったわけです。よく考えてみれば、学問では能力が問われ、家柄が優先する社会とは異なります。低い身分の家柄であっても、能力があれば認められるという、新しい観念が生まれつつありました。このように、新島少年にとって、この機会はまさに希望の光でありました。ところが、藩主の勝明は1年足らずで急死しました。弟の勝股が藩主の座に就きます。この新しい藩主は遊ぶことしか考えない。学問奨励策を廃止してしまいます。勉強して新しい世界を拓こうと思っていた新島少年は、憤ります。友人に宛てた書簡で「嗚呼、勝股可誅乎」と書き送っています。藩主に天誅を加える、つまり殺してしまおうと言うのです。新島は後にこう記しています。「私は学問を続けようという望みが一切ふっとんでしまったように感じた」と。新島少年は大きな挫折を経験するので、父の祐筆職の助役に就任し、退屈の日々を送ります。そこで消極的反抗をするのです。熱心に仕事をしない、サボタージュです。新島少年はなかなか根性があります。「私は君命を無視したかどで、出仕を放免されることを願っていた」と回顧しています。江戸時代は脱藩したら殺される。逃場がない。新島は、なぜ仕事をしないのかと上役にも父親にもよく殴られた、と記しています。こういう生活が嫌で嫌でしょうがない。そういう時に新島は、ある本と出会います。

「新島の愛読書」であります。一つは『漂流紀事』（『ロビンソン漂流記』）。南海の孤島で一人、誰にも束縛されない自由な生活。自分で自分の生活を律し、自分の人生を決める。自由だと言っても今の私たちには少ししんどいですね。新島はこれを読んで「いいな」と思った。それほど窮屈な生活を強いられていたのでしょうか。祖父から「こんな本を読んだら道を間違え」と注意を受けます。次に『連邦志略』というアメリカの制度や成り立ちを説明した地理書です。これにも大きなショックを受けます。「アメリカの大統領は国民が選ぶ」と

いう内容に「私はそれを繰り返し読みました。すると驚嘆のあまり私の頭はとろけそうな気がしました」と回顧しています。皆さん、頭がとろけるような体験をしたことがありますか。彼には相当大きなショックでした。身分や親の地位によって自分の将来が決められていた中で、アメリカは一番優秀な人を国民が選挙で選ぶ。江戸時代でも、「入れ札」と言って、庄屋さんを選挙で選んだという記録があるようですが、身分制社会では、門閥（生まれ）が一生を決定します。アメリカに対する憧れと同時に、封建身分社会に対する失望が比例して大きくなってきます。新島の脱国にとって、ここが重要なんですね。

忠誠心の喪失

1853年、アメリカの黒船が出現し、日本に開国を迫ります。幕府は天皇の勅許を得ないままに、アメリカの力に押されて開国をしてしまいます。これに対して、あくまでもアメリカを打ち払えという攘夷派が台頭してきます。世論は開国か攘夷かという二つに意見が分かれます。しかし、新島には幕末の青年に共通するような危機意識があまり見られない。後に徳富蘇峰などが、新島先生は幕末の危機意識から脱国したと言うように、脱国を正当化して「愛国者新島襄」のイメージを作り上げてしまうのですが、私はちょっと違うのではないかと考えています。むしろ「危機意識が乏しい」ことに意味があったのではないかと考えるのです。新島襄は幕末の危機に「命をかけて国家（封建体制）を守ろう」とは決して言わない。なぜならその国家こそが新島を閉じ込めている、いわば「牢獄」でしかなかったからです。黒船は新島襄にとって何であったのか。私はある時、横浜の開国記念館で黒船がやって来た時の錦絵や瓦版を調査したことがあります。天下の危機だと騒いでいるのは侍だけで、町民は丘の上で弁当や三味線を持って「わあ、黒船だ」と見物して楽しんでいる状況を描いた錦絵や瓦版が残っています。当時のアメリカ人の報告書にも「日本の庶民はなんと好奇心が強いことか」と記されています。「黒船は日本の危機である」という捉え方は一つのストーリーであって、庶民はそんなふうには思っていない。新島は黒船に新しい時代を象徴する「解放の予感」を見たのではないかというのが私の考えです。新島の資料を丹念に読み込んでいくと、そのように考えられるのです。

ここで私は、新島が武士の存在理由である「忠誠心」を失ったことに着目するのです。皆さんは同志社に忠誠心をもっていますか。私などは同志社を退職する年齢になって、幾分か忠誠心が下がりました。近頃、「同志社がちょっと心配だな」と思うのですが、武士が「主君のために命を投げ出す」というのは、鎌倉時代以来の武士の存在理由です。武士から「忠誠心」を取ったら何も残らない。それほど「忠誠心」というのは重いものです。しかし、新島は「お殿様を殺してしまえ」と言うぐらい、激しく主君を罵っています。忠誠心を失った新島は次にどこいったか。武士という属性から離れて、個人の内面的問題へと思索が向くのです。これは私の考えですが、新島には当時の青年には類を見ない、「個人」の主体性の自覚と自由を求める新しい青年像が見えてくるのです。この時代に「私はどのように生きるのか」を考えた人はあまりいない。坂本龍馬も藩から「国家＝公」に「忠誠心」を変えます。西郷隆盛は最後まで古い忠誠心と新しい国家に対する忠誠心との狭間で揺れ動くのです。新島のベクトルは「私＝個人」に向かいます。これがすごいと思うのです。明治になって、留学したり外国の書物と出会って、新しい青年像が形成されます。「私の問題」にかかわった北村透谷とか夏目漱石とかは「私は何ものか」「個人とは何か」について考えます。女性の中からも「女性はなぜ選挙権がないのか」「女性とは何か」と考える人々が登場します。与謝野晶子のように「女性としての私」を主張します。これら明治の新しい青年像に先立ち、新島襄は、個人の主体性の自覚と自由を求めた青年と考えることができます。そして「漢訳聖書」と出会うことによってこのことは決定的となったのです。「この世界をつくったのは誰か」というものの考え方、日本の安中藩に忠誠を尽くすとが將軍や天皇に忠誠を尽くすわけでもない。もっと大きい、この世界と自分の創造主に対して忠誠を尽くすと考えるようになったのです。新島襄があまり自己葛藤をしないでキリスト教に入信していったのも、忠誠心の喪失が大きな要因だと思います。

日本脱国とアメリカ生活

新島は1864年に函館（箱館）から脱国して、翌年ボストンに到着します。当時、横浜や神戸とは異なり、函館は江戸幕府から一番遠いところにあり、比較的別天地でもあったわけです。函館から日本を離れたのは新島だけではありません。今、ニューヨークに行くのもボストンに行くのも特別なことではありません。私も明日からモンゴルに行くのですが、モンゴルに行くためにはクレジットカードやお金を持って行く。モンゴルで迎えてくれる人もいて、空港に出迎えてくれる予定です。新島の時代には、まず日本に帰れる保証がない。ANAもJALもありません。帰ってくる定期航路もない。新島はどういう思いで出かけて行ったか。今でも若者がお金を持たずに一人で外国に出かけます。いざとなれば日本大使館もあるし、何とか帰国できます。新島は帰るあてのない旅に出かけるのです。そういう状況の中で脱国します。

新島のアメリカ生活を保障したのは何であったのでしょうか。それはキリスト教です。ハーディ夫妻に出会って彼の10年にも及ぶアメリカ生活を保障してもらったのですが、ここでキリスト教はどういうふうに関与したのか。もし彼がキリスト教とは全く無縁の異教徒であれば、新島のアメリカ生活は惨憺たるものになっていたかもしれません。アメリカ生活を保障したのはキリスト教信仰であったわけで、新島自身もそれを自覚していたのです。新島はアメリカ生活の中で、「市民社会の思想、個人の確立、個人の権利、個人の自由」に出会って、非常に感動したと思うのです。やがて、薩摩藩の留学生が訪米してきます。薩摩とイギリスが戦争をしたことはご存知ですか。薩英戦争の勃発は、薩摩のお殿様一行の大名行列が生麦村に差し掛かった時、イギリスの領事館の人が馬に乗って行列を横切ったので、護衛の武士が彼らを刀で切り殺しました。イギリス側は「犯人を出せ」と、薩摩に戦争を仕掛けて、薩摩が負けました。その後、新島の脱国した翌年の1865年、薩摩藩は15人の留学生をイギリスに送っています。負けたからといって、恨みをもって「絶対、イギリスなんか行ってやるか」ではなく、イギリスに学べという方針を立てる。彼らはイギリスのマンチェスターに行き、大工場で生産されている機械や蒸気機関車（ロコモーション）が走っているのを見て大きいショックを受けます。薩摩藩からイギリスに行つてアメリカに渡った人たちもカルチャーショックを受けます。新島も、薩摩の留学生が訪米してきたという情報を得、最初は彼らと会うことを拒否しますが、やがて徳川幕府が崩壊したという情報を得ます。

明治政府の使節団との対面

1872年、岩倉具視欧米使節団がアメリカにやって来ます。日本の近代化に役立つ制度を学んできたいとアメリカから出発します。この使節団のもう一つの目的は幕末に締結した不平等条約の改正にあります。アメリカ人、フランス人、イギリス人が日本で犯罪を起こしても罰せられないという治外法権と、外国製品に関税をかけられない条約を結ばされたのです。こういう日本の経済、治安を揺るがすものを改正して対等な条約を結ぶ必要があった。それにはずいぶん時間がかかります。新島はアメリカで、岩倉使節団の中で教育調査の役割を担った文部理事官・田中不二麿と対面します。この仲介をしたのは、薩摩藩からイギリスに留学し、さらにアメリカに渡って活躍した森有礼です。当時のアメリカ滞在の留学生が集められます。日本国家の代表が来るということで、多くの日本人は土下座をして迎えるのですが、新島は立って握手をするのです。新島は次のように言いました。「私はボストンの友人たちの支持により教育を受けてきた者であり、日本政府からまだ1セントたりとも支給されることがない。したがって理事官は私を日本政府の臣下として扱う権利はない」と、こう言っているのです。命令や義務ではなく、報酬を定めた上で日本政府と契約を交わして協力すると答えるのです。自由な日本人として「自己の責任」において国家とかかわると、自由な個人としての「日本市民」という意識が新島に確立していたのです。当時の日本人には、こういう人はいません。ここに新島の、ある意味での偉大さがあるのではないのでしょうか。

自由の観念とキリスト教

新島はそこまで「自由」にこだわります。新島の「文明の基（もとい）」という小さなエッセイが残っていますが、そこで新島は、こう言っています。

「耶蘇曰く、我が自由になす者は真の自由なり、真なる哉、此自由とは神を信じ天命に随ふ者を云也、乃天命に随て而后自由の民となる也」。

キリスト教信仰は真の自由を人間に保障する。ここが重要なんですね。「キリスト教の信仰というものが本当の自由を与えてくれるのだ」と新島は言っているのです。こういう「お前は宗教を強制しているのか」と言われそうですが、そういう意味ではありません。

「神の意をせば人必ず広く人を愛し人の為は何事も為し、力を以て人を制せず、威を以て人を脅さず、強くして弱きを扶け、知ありて誇らず、貴くして益々遜り、富ておごらず、賤くして卑屈に流れず、貧して貪らず、甘んじて人の罵詈も受け、克く人の無礼をも許し、人の幸福を計りて日も足らず、神の義を慕ひて死に至るまで止まず」（同上）。

これ、どう思いますか。同志社はこういう人間をつくらんと言っているのです。すごいと思いませんか。これを支えるものが新島にとってはキリスト教であったのです。一般に言われる「良心教育」とはこのことを指しているのです。キリスト教主義による「徳育」によって可能であるということです。

新島にとって自由な人間になることは、深い意味があったのです。学校に出るのも自由だし、行かないのも自由。そういう自由はあるけれど、新島の自由は、もう少し内面的で「自由な人間」になることは何かという問いかけがあります。人間の内面にあるさまざまな偏見や恨みなどからも自由になること。自分の中に偏見もある、その偏見を克服することが本当の自由な人間になることだと新島は言うのです。現代社会においては、言論の自由、表現の自由といういろいろあります。最終的には「人間の心の自由」とは何か、人間が自由に生きるとは何かという問題に行き着くのです。新島が求めた「自由主義」「自由教育」の目的は、行き着くところは「良心」だったのです。良心に到達するためには我々がもっている内面的な自由を確立することが必要だったのです。

「国際主義」という用語もよく誤解されます。「国際主義だから留学しましょう」「国際的な人間は英語を話さなければならない」というように、同志社でもよく用いられています。新島はそんな薄っぺらなことは言っていない。新島が残した言葉には「国際主義」という用語はありません。もう少し後の原田助総長が、同志社教育に国際主義を導入した最初の人でした。日露戦争後に「膨脹的国民」や「世界化」「世界道徳」という表現が一般化してきます。「世界人類は同胞兄弟」という言葉も一般化してくる。もともと「国際主義」という言葉は「万国の労働者が団結する」という共産主義の標語で共産主義の概念であったのです。50年ほど前には日本の過激派集団の赤軍派が国際主義と言っていました。歴史的にはある特別な意味で使われていたこともありませぬ。

原田助の国際主義

1907年、原田助が第7代同志社社長（後に総長）に就任します。この人は熊本出身ですが、同志社に国際交流を導入します。また民族的宗教から世界的宗教への転換を唱えました。原田は「東西両洋の文明を融化し、両者の長所を結合して世界的新文明を建設するの一大使命」を有した人物の養成が同志社に求められている、と主張しました。そういう意味での「国際主義」です。アジアからヨーロッパにかけて積極的に講演活動を展開します。「科外講演」と称して世界からさまざまな人物を招聘し、学生に聴講させるという「国際化」を実践します。当時の帝国教育界はこれを高く評価して同志社を表彰しましたが、皮肉なことに、こうした国際主義が同志社の伝統派の反対を受けて、原田は同志社を追われてしまいます。

昭和のファシズム期になると、「国際主義」という用語に対しては否定的な意味が込められました。新島は「国際主義」という言葉を用いていませんが、官立学校の愛国主義を批判

し、独自の愛国主義を展開しています。これが新島の「国際主義」の思想に近いのではないかと思います。「己れの一国を愛し、何事も一国の為に止まりて、兎角愛国より偏頗の心生じ、我が日本を愛して外国人を敬視するの愛いなき能はず」と、官立学校の愛国主義教育を批判しています。新島は愛国主義の基盤に「愛人主義」を置きます。新島によれば「愛人主義」は「大いに愛国よりは狭きに似たれども、人を愛するは、一国に限らず世界の人をも人と見なしてこれを愛せば、決して区域の狭き者にあらず」と述べています。「人を愛す」という行為は国家を超えていく普遍的な真理であり、日本人を愛し、世界の人々をも愛していく。新島の愛国主義は戦争によって日本の力を誇示するのではなく、世界の人々を愛し、世界の国々から尊敬されるものであった。どちらの方向に向かって日本は進むべきか。新島はこの時代に、日本の愛国主義の在り方をおして警告を発した稀な教育者でありました。「愛人主義」は、日本帝国が陥っていた「排外主義的な愛国主義」を克服すると新島は考え、同志社の愛国主義はこの一点において国が言う愛国主義とは異なると書いています。「愛人主義」こそ、新島が描いた同志社の国際主義の原点だと私は考えます。同志社の「国際主義」というのは、単に英語を勉強して留学をし、日本の経済のために世界を飛び回ってお金を儲けるというのではなく、地球上の半分の人々が貧困や飢餓の日々を送っている現状において、こうした人々に貢献する国際主義=愛人主義と平和主義、これこそが新島が同志社教育に託したものでないでしょうか。他大学が主張する国際主義との相違点は何か。同志社の国際主義の特質は世界に貢献すること、新島が同志社教育に託したのは、救いを求める世界の人々に手を差し伸べる「国際主義」であったのです。

新島襄の私学思想

「君、京大と同志社に受かったら、どっちに行きますか」と質問して、「私は同志社に行きます」と言う人は、あまりいないと思います。ところが、明治の初年には、現代のような私学と官立との違いはなかったのです。もともと、同志社が創設された時には京都大学は存在しなかったのですから。新島は「同志社大学設立の旨意」の中に「私学の存在」を強調しています。1875年に新島襄が「私塾開業願」を京都府に提出して同志社を創設してから大学設立運動を展開する時期は、教育の国家管理が確立する時期にあたります。1878年、579校の中等以上の教育機関で官・公立は65校、私立は514校でした。この514校が日本の近代化を支えたのです。81校の専門学校のうち、私学は61校もありました。さらに自由民権運動に伴って独自の教育理念をもった私学が創設されるようになります。当時の文部省の資料を見てみると、地方官（知事）より文部省に私学条例を制定する請願がいくつか寄せられています。「私学抑制のための条例をつくれ」という内容の嘆願書も出ます。

明治政府はいろいろな方法で私学抑制政策を展開します。まず「徴兵猶予」の条件を私学には認めない。官立学校の学生だけに徴兵猶予の条件を与え、私学に学ぶ学生にはこの条件を認めないというものです。

新島は怒りましたね。「今の令により考えれば、私塾の勢力を断ち、益々官校を盛んならしむるが如し」。こういうことをすれば、私学を衰退させていく・公立学校だけが隆盛することになる。「如何なる人物が官校より出来しや（官吏のみ）、官校に於いて卒業せし者が降りて民間に在り、人民の位置を進めんと計る者幾人ぞある」と、厳しく国家の教育政策を批判しています。当時の官立は役人になる人材を養成しているのに対して、私学は民間に在って、「人民の進歩」に貢献する人材を養成していると述べ、私学には官立には見いだせない教育理念があり、また教育役割をもっていると主張するのです。

私学教育の可能性について新島は次のようにも述べています。「地方の有志輩、協同一致して拠金をなし、その任に当たるの人を選び」。すなわち、私学は民衆の「自治」の原則のもとに運営されるというのです。私学は、政府の資金で運営される官立とは異なり、自分たちの力によって学校をつくってきた。「自ら先生となるにあらずして、却って身を社会の犠牲となし、社会の進歩を計るの人」を養成することを目的としており、私学同志社を設立する意義もここにあると新島は力説します。日本の近代国家をつくるためには自立した国民を養成する必要があり、それは私学同志社が目指す教育目的に他ならないと新島は考えるのです。新島は軍勢力によらずして教育によって国を興し、「海陸軍を増すは弥（いよいよ）末の浅論なり」と主張します。人間としても優秀な国民をつくって、他の国々の人々を愛し、他の国々の人々から愛され、尊敬されるような国家になること。軍事大国になって国を興すのではなく、世界の人々から尊敬される国家をつくるのが平和をもたらすと新島は考えたのです。「私学の設立は平和主義をもたらす」という信念のもとに、「教育立国論」、つまり教育によって国家を興してゆくことの重要さを新島は主張し続けます。

1878年（明治14）年に京田辺校地に「南山義塾」という私学が創立されました。南山義塾は田辺の地元の有志がお金を出し合って「私共儀 我国目前の急務は盛んに教育を施し人民の知識を開発するに在りて確信仕候」と設立の趣旨を述べて京都府に開業願を出します。新島は「有志諸君の篤志よりこの美挙あり」と高く評価します。そして次のような激励の言葉を送っています。「学校をして一地位に安着せず、日々月々進歩改良せしむるの策なかるべからず」。学校をつくっただけで満足しないで、どんどん新しいものを取り入れて改良してゆく必要がある。「今の教師多くは人物を養成するを以て其の目的とせず、月給の多少により其所を移し月給を貪り、いささか己の淫欲を逞する」。多くの先生は学生の人格を育成することを教育目的としなくて、給料の多いところがあればそこに移ってしまう。自分の欲望だけを満たせばいいと考えている、と教師の雇用には十分注意をしなければならないと忠告しています。また「生徒の気質に随い幾分か教する所を異にし、生徒をして皆進み徳高からしめん」と述べて、個々の生徒にはそれぞれ個性があるから一律に教育はできない。その個性に従って教えるところを考えなければならない、と個性教育の重要性を指摘しています。もう一つは徳育教育についての忠告です。道徳は教えられないので、教師が「自身生徒の率先者となり、生徒の標準となる」ことが大切と述べています。私たち同志社の教師にとっても厳しい言葉ですね。教師が道徳的でないのに「道徳的であれ」と教えるのは欺瞞的でさえあります。政治家がいくら道徳教育を推進しても、政治家自身が道徳的に生きてみて初めて道徳教育が可能となるのです。そうしなければ、道徳教育をおして嘘を教えることになります。

キリスト教主義と良心教育

同志社の建学の精神が語られる時、一般的には「キリスト教主義」「自由主義」「国際主義」「良心教育」と並立して説明されます。新島はそのようには言ってはみませんし、キリスト教主義が「良心教育」と「国際主義」を支える基盤であることは間違いのないと思います。「同志社大学設立の旨意」を見てみましょう。

「かくのごとくにして同志社は設立したり。然れどもその目的とする所は、独り普通の英学を教授するのみならず、其徳性を涵養し、その品行を高尚ならしめ、その精神を正大ならしめんことを勉め、独り技芸才能ある人物を教育するに止まらず、所謂良心を手腕に運用するの人物を出さんことを勉めたりき」。

キリスト教の徳育を教育の根底に据えるというのが新島の教育思想の特質であります。キリスト教主義を学ぶ機会は本当に少なくなりました。また、同志社出身の先生が少なくなってきたのも、大きく影響しているのかも分かりません。公募して他大学の研究者を雇用するというのが文部科学省の方針ですが、ほとんどの学部では大学院の博士課程まであり、博士の学位を授与しているにもかかわらず同志社出身の研究者を雇用しないのは、大学院教育のどこかに問題があり、つまるところ先生方の怠慢としか思えないのですが、このように同志社の教育が継承されないところに問題があると思います。かつて水曜日「チャペル・アワー」は、全講義を止めてみんなが一緒に考えたり、議論するという時間にあてていました。4年間の学生時代に賛美歌を歌ったり、聖書を学んだり、牧師さんの話を聞く時間がかなりありました。こういう雰囲気をおしてキリスト教主義が浸透していくのです。新島はこのことを「薫陶」と表現しています。自然と染み込んでゆくことを意味しています。そういう努力を同志社がやるべきではないかと思うのです。文部科学省から、春学期・秋学期は各々15回の授業をしないといけない、と通達がありました。学生の学力を重視して、厳しく試験で追い立てる。新島が危惧した官立のやり方を、今の同志社は踏襲しているのです。もっと余裕を与えて人生にかかわる問題について深く考えたり、同志社の精神的な伝統について学ぶ機会を与えてはどうでしょうか。そうした雰囲気の中で、自然と「良心教育」は「薫陶」されてゆくのではないのでしょうか。同志社大学では「良心教育」を重視していますと言いますが、具体的にどこで何をやっているのでしょうか。全学共通教養教育センターが提供している、いわゆる「同志社科目」以外に何かあるのでしょうか。「良心教育」は同志社で学んだ先生方が伝えてゆかなければならない同志社のDNAのようなものです。キリスト教主義の雰囲気の中から自然と学ぶものではないでしょうか。

「キリスト教の徳育を教育の根底にする」というのが揺るがない新島襄の考えでしたが、軍国主義の時代になって「これを外せ」という圧力が加えられます。新島も「基督教主義をもって徳育の基本と為せり。吾人が世の教育家とその趣を異にしたるもここに在り」と言っていますように、これを外せば、新島の同志社でなくなってしまうのです。

良心碑と良心教育

良心教育を象徴する「良心碑」は正門から入ったところにあります。今出川キャンパスでは、1940年11月29日、「新島襄永眠50周年記念」の行事として建立されました。碑文には、こう書かれています。「良心之全身に充滿したる丈夫の起こり來らん事を」。これは、1889（明治22）年、新島が学生（横田安止）に宛てた手紙の一節であります。しかし、良心碑が建立された経緯はなかなか複雑です。1940年という軍国主義の最中ですね。軍国主義の重任を避けるために、同志社教育の目的をあえて「良心教育」と表現したのです。今日では、良心教育はキリスト教主義の徳育ということで解釈されていますが、当時の人たちは必ずしもそのようには理解していませんでした。明治期にさかのぼってみると、「大日本帝国憲法」と「教育勅語」の成立に大きな役割を果たした井上教は、「人民の良心」の保護について述べています。また、同志社社長の横井時雄の父で、熊本バンドの生みの親ともいへば幕末の思想家・横井小楠は明治元年に岩倉具視に請われて明治天皇の教育理念を書きあげています。そこでは「良心教育」の重要性を力説しています。また明治天皇に与えた遺書「遺表」においても、「良心教育」の重要性について繰り返し力説しています。この「遺表」は、小楠の娘婿である海老名弾正が大切に保管していました。このように、「良心」という言葉は同志社の、とりわけキリスト教の占有物ではなかったのです。因みに、「良心碑」の建立を思いついたのは徳富蘇峰でしたが、蘇峰の父である徳富一敬は横井小楠の最も近い弟子であったのです。明治天皇の教育理念を「良心碑」にかがせたことは、苦肉の策とでも表現しうるものであったと思います。良心碑を建立する少し前には同志社の教育綱領が作られ、国家主義と妥協せざるを得ない状況に立たされました。こうした先人の苦悩を理解しておかなければなりません。そして、いま問われるべきは「良心教育」に込められた意味であります。同志社がどういう意味で「良心教育」を実践するのか。空疎な言葉として理解すべきではないと思います。あえて1940年に「良心碑」がつくられた経緯を理解し、「良心教育」に込められた意味とは何であったのか、その根底にあるものが問われなければならないと思います。同志社の「建学の精神」について考えることは、日本の高等教育の再検討にも通じるのではないかと思います。同志社で学ぶ意義と日本の高等教育を批判的に考える視点をもっていたら幸いです。

私は今年度いっぱい同志社を去りますが、本日の講義で何かしら考えていただけることがあれば嬉しく思います。これで今日の講演を終わらせていただきます。ありがとうございます。

【参考文献】

新島襄全集編集委員会編 『新島襄全集』1～10 同朋舎出版 1983～1985年

同志社編 『新島襄 教育宗教論集』 岩波書店 2010年
上野直蔵編 『同志社百年史』 通史編一 同志社 1979年
田辺町近代誌編さん委員会編 『田辺町近代誌』 田辺町 1987年

※引用しました出典の一部につきまして、読みやすくするため平仮名、新字体（現代仮名遣い含む）にて表示しております。

2018年5月30日 同志社スピリット・ウィーク春学期
今出川校地「講演」記録

※沖田行司先生には、同志社スピリット・ウィーク秋学期でも、同じく建学の精神をテーマとして京田辺校地にてご講演いただきました。

講演日 2018年11月1日

講演題 「同志社建学の精神とは何か」